



Title	TA (Teaching Assistant) の声 サイバーメディア フォーラム no.9 CALLシステム
Author(s)	
Citation	サイバーメディア・フォーラム. 2008, 9, p. 50-53
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/70271
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

ティーチング・アシスタントとしての所感

柳田 亮吾（言語文化研究科 言語文化学専攻）

はじめに

ここでは 1 セメスターの間ドイツ語初級のティーチング・アシスタントとして授業に携わった経験から、WebOCM を使った授業の様子とそれについての一社会言語学研究生としての個人的な所感について述べていきたいと思う。

WebOCM を使った授業について

授業では WebOCM の教材をもとに進んでいくのだが、それについてまずは簡単に説明をしておこう。主に授業で使用するのは “German Dynamics” と ”新世界“ の 2 つである。” German Dynamics” とは従来の紙ベースの教科書を WebOCM 上にアップしたもので、いわばインターネット上の教科書というところである。これを基本として生徒は自身のペースで学習を進めていくことになる。従って、教師が独断的に進める授業のペースに生徒が合わせるという、従来の授業のシステムとは根本的に異なる形態の授業がそこでは展開されることとなる。また、この “German Dynamics” が従来の紙ベースの教科書と異なる点は、動画にて教師による学習項目の補足が享受できることや、その課の新出単語の音声を実際に聞けることなどがあげられる。このような工夫によって、“German Dynamics” は教科書、教師の説明、発音練習用の教科書付随の CD の 3 役を担っているのである。

次に、授業において大きな役割を果たすのが “新世界” といわれる掲示板である。これは教師と生徒をつなぐコミュニケーションツールである。ここでは “German Dynamics” で学んだ学習項目についての生徒の疑問、質問が投稿され、教師がそれについて説明をすることができる。これによって生徒は “German Dynamics” による自主学習における疑問点を、授業内外を問わず自由に質問することが可能である。そしてここで重要なのは、この “新世界” に

よって、従来の時間の定まった教師主導の授業形態では必然的に限定されてしまう生徒から教師へのコミュニケーションが保証されうる、という点である。これまでの授業形態においても、確かにある程度生徒から先生への質問という時間は確保されているものの、わずかな時間に限定されており（当然その質問タイムも基本的には先生から提言されるにすぎない）、授業の進行いかんによっては省略されがちであったことは否めない。つまり、これまでの授業は教師から生徒への一方向のコミュニケーションを基礎として成り立っていたといつても過言ではない。しかしながら、“German Dynamics” による自主的な学習と “新世界” というコミュニケーションツールの導入によって、これまでの教師から生徒への一方向的なコミュニケーションから教師と生徒をつなぐ双向的なコミュニケーションの可能性が大きく開けたといえるのではないだろうか。

以上が授業において、主要な役割を果たす教材であるが、ここではさらに評価についても簡単に説明しておきたい。基本的な授業の流れとしては、生徒が “German Dynamics” をもとに自主学習を進め、疑問点を隨時” 新世界 “に投稿し、それに教師が応答するという形で授業は進行していくのだが、授業の前半と後半にそれぞれ前回授業の復習テストと当該授業内容についての小テストが行われる。この小テストも当然ながら WebOCM 上で行われるものであり、選択問題から穴埋め式の記述問題、自由記述問題まで幅広く問題設定が可能である。この授業毎の小テストと月間テスト（月一回行われる小テストよりも規模の大きなテスト）と期末テスト（最終テスト）が基本的な評価の対象となる。また、WebOCM 上で管理されている出欠や” 新世界 “への投稿からみた授業への参加度も評価の対象となる。些末な点ではあるが、このテストの方式によって、教師の採点の負担はなくなり（採点はコンピューターが自動

的にしてくれる)、生徒にとっても自身の苦手とする項目の反復練習（Web 上の試験なので何度も受験可能）ができるような工夫が施されている。

最後に、この WebOCM を使った授業の何よりも画期的な点は、時間と空間を超越しあらゆる人への教育が理論的には可能となる点であろう。これによって、WebOCM を利用できる、つまりインターネット環境を利用できることを前提としながらも、あらゆる人が高等教育を享受することが可能となるのである。ここではとりあえず教育の意義（例えば、英語やドイツ語といった有力言語を学ぶことが少数言語を学ぶことよりも文化的・社会的価値があるとされていること）については問わないことにして、これによって経済的理由による高等教育の機会の不均衡が理論的には解消される。さらにこうした教育形態が発達し、この授業によってある種の資格を取得できるシステムを作りあげることができるのならば、教育のあり方も大きく変わるのでないかと思う。

おわりに

筆者自身はドイツ語の専門家でも言語教育の専門家でもないため、ここでは教育における細やかな問題点やその解決方法について述べることはできなかった。しかしながら、筆者の専門とする社会言語学や教育社会学といった分野においてこれまで問題提起してきた教師と生徒間における一方向性のコミュニケーションのあり方や教育機会の不均衡といった問題を考えるにあたって、非常に示唆的な教育実践に携わったことは、自身にとって非常に有益な体験であった。今後このような教育形態がどのように“進化”していくのか、興味深く見守りたいと思う。

C A L L 教室を使った自律的学習 —ドイツ語教育の T A としての経験から—

言語文化研究科 言語文化学専攻

田村 知佳

私はここ数年にわたり、大学教育実践センターに所属されている岩居弘樹先生のもとで 1 年生対象の C A L L 教室を使ったドイツ語授業の T A を勤めさせていただきました。中でも 2008 年度は情報科学研究科に留学してきているドイツ人ともう一人英語を専門としている、私と同じ所属である言語文化研究科の日本人の大学院生と共同で T A を担当しました。

授業では、ドイツ語を使った簡単な挨拶や数字、アルファベットの発音を勉強した後、先生が示された会話文の雛形と条件に沿って学生さんが 4 人グループで会話文を作成します。それを最終的にはビデオで撮影し、クラス全員でお互いに評価する、といったものです。これは今年度の課題ではなかったのですが、独自の会話撮影に加え、与えられたテーマの背景をインターネットで調べ、日本語でまとめることが課題として与えられたこともありました。こういった課題は、授業の場でインターネットが使える環境の C A L L 教室でなければ可能でなかったと思思います。

この授業では、岩居先生は特に学生さんの自律的な学習、つまり自己責任による学習に力を入れられていました。そのため、例えばあまり積極的にグループ・ワークに参加しない人がいた場合、これはグループの他のメンバーに迷惑がかかります。また、撮影本番に遅刻したり、無断で欠席する人が時々います。こういった行為に対しては、岩居先生は厳しい評価を下されていました。

岩居先生自身は授業中では学生さんが作文したり覚えたりしている作業中には、課題を指示する以外あまり活動に介入されてくることはありませんでした。そのかわりに、グループ活動で自律的な学習を

支援するための場を作つておられました。

その際、岩居先生の授業では moodle といったオープンソースの e ラーニングプラットフォームである学習過程管理システム(Course Management System CMS)を使っておられました。私も大学院でこのシステムを使ったゼミに参加していますが、その利点は比較的簡単にディスカッションのためのフォーラムを Web サイト上に作ったり、撮影したビデオなどに対しコメントを残すことができます。また、moodle へのアクセスは授業以外でも可能なため、実際に学生さんが授業外で集まらなくてもグループ作業を自宅などから行うことも可能でした。そのほか、学生さんが作成したシナリオをこのサイトに公開することで、即時に T A である私たちが文章をチェックすることができます。こういった点で、各自インターネット利用が可能な C A L L 教室の利点が授業で活用されていました。

このような授業の中で、ドイツ語を始めて数ヶ月の学生さんたちに、会話文の作成の手伝いや発音の指導を個別にするのが、私たちアシスタントの仕事でした。また、発音の指導の際には、実際に私とドイツ人の留学生でシナリオを M P 3 形式で吹き込み、それを moodle で公開し、学生さんがそれを何度も聞き込むことで練習していました。この授業では、特にドイツ語の発音を日本語のカタカナにして覚えるよりも、何度も音声を聞き込むことで耳から覚えることが求められます。

1 学期間の授業では 2 回課題が与えられ、各自 2 回ビデオ出演をすることになります。最初はほとんどのグループは岩居先生が指示された雛形の中の単語をいくつか変えたりするだけでシナリオ作りは終ってしまいます。しかし、その中にはオリジナリテ

イを活かしたり、「ウケ」を狙った演技をする学生さんがいます。それをひとつのきっかけに、2回目の撮影からは、小道具を使ったり動きを入れたりすることで、よりオリジナルな演技を目指す学生さんが増えてきます。

その際、オリジナリティを活かすため、学生さんはシナリオに入れたい表現などを日本語で用意します。それをドイツ語に訳し、出来るだけ不自然でない形でシナリオに挿入するのが私たちアシスタントの役割でした。ここでは、日本語で考えられたネタがドイツ語では表現しきれないものであったり、冗談として捉えられない表現だったりもするので、この点もよく考慮してドイツ語の文章を作る必要があります。

グループワークの最後に、クラスメートで撮影したものをお互いに評価します。シナリオの中には、雛形の文章など、各グループで共通する文章が出てきます。これらの文章については、学生さんが自分たちの出演のため、かなり練習してきた文章でもあります。そのため、教師がする評価とはまったく違った視点から評価が行われます。これは最終的に自分たちの演技を批判的に見て、次回の撮影でさらに良い発音や演技を目指すきっかけにもなっていると思います。

最後に、私自身の感想なのですが、岩居先生のC A L L 授業から、近年よく外国語教育の研究の中で議論されている「自律的学習」について考えさせられました。普通のドイツ語の授業では、どのような課題にすればより良い学習効果が得られるか、また学生さんにとって楽しい授業ができるかを考えなければなりません。しかし、この授業のように自分で学習内容やグループ内での作業の分担を決定することで、より自律性を尊重することができていたのではと思います。また、自己責任を強調することで、学生さんたちもドイツ語を勉強する以外のグループワークに参加するための大切なスキルを磨けたのではないかでしょうか。

また、このような学生の自律性を尊重する授業は C A L L 教室の環境が整っているからこそ可能であったと思います。

最後に、岩居先生が担当される C A L L 授業の T A を通してこのような貴重な体験をさせていただいたことを嬉しく思います。

参照した Web サイト：

Moodle の公式サイト <http://moodle.org>

ウィキペディア <http://ja.wikipedia.org>